スペイン語の冠詞と日本語表現 —— 翻訳に見られる冠詞の問題

1）スペイン語から日本語へ－不定冠詞の場合

(Problemas del artículo en la traducción del español al japonés, artículo indefinido)

佐藤玖美子

0．いわゆる冠詞というものを持たない日本語を母国語とする者にとって、冠詞の問題は外国語習得にあたっての大きな障害の一つとなっている。しかし、スペイン語の祖語の古典ラテン語も冠詞を持たず、ロマンス諸語に冠詞が出現した原因の一つとして、格の崩壊などいろいろ挙げられる中で、冠詞を持つギリシャ語文献の翻訳上、冠詞の必要性が生じたことがあげられている。では、日本語の場合、スペイン語からの翻訳時に冠詞はどのように処理されるのだろうか？　また、逆の場合、日本語のどのような名詞句に対してスペイン語では冠詞を当てるのでだろうか？　このようなテーマのもとに、まず本稿「1）スペイン語から日本語へ」においては西文和訳の場合について、Gustavo Adolfo Becquer著 “La corza blanca”，高橋正武訳 “白鹿”（大学書林語学文庫）、Miguel de Unamuno著 “Recuerdos de niñez”，宮城昇訳 “幼き日の思い出”（大学書林語学文庫）、Vicente Blasco Ibáñez著 “Puesta de sol”，笠井鎮夫訳 “落日”（大学書林語学文庫）、Juan Ramón Jiménez著 “Platero y yo (Aguilar)，長南実訳 “プラテロとぼく”（岩波書店）の4作品を資料として考察を行ってみたいと思う。

なお、訳者はいずれも我国を代表するスペイン文学者かつスペイン語学者であり、翻訳は原文のスペイン語に捕らわれず、きわめてこなれた美しい日本語であることを申し述べておきたい。また材料として報道文の類をも是非取り上げたかったが、日本語訳の資料がないため、今回は省かざるをえなかった。なお、日本語からスペイン語への対応の参考として、吉本ばなな著

“キッチン” 及びその続編 “満月”、Junichi Matuura, Lourdes Porta訳 “Kitchen” “Luna llena” を用いた。

0.1. 比較対象の材料とする冠詞とは、定冠詞 el, la, los, las（中性のloは対象外とする）及び不定冠詞un, una, unos, unasとするが、次の用法のものは、今回試みるような日本語訳との比較対照においては、あまり重要性をもたないと思われるので、本論は対象としないこととする。

1）代名詞として用いられている定冠詞及び不定冠詞
el de Juan（ホアンのそれ）　uno de ellos（かれらの一人）など

2）不定詞と用いられる場合の冠詞　el nacer（出生）　al salir（出がけに）など。しかし辞書の名詞の項に記載があるような不定詞は名詞として扱う。

3）形容詞句につけられる代名詞化の冠詞　el pesado（重い方）など

4）固有名詞が伴う定冠詞　el Japón（日本）　el pobre Paco（哀れなパコ）など。

5）日付け、年号、時間が伴う定冠詞　el（día）3（3日）、el（año）1994（1994年）、a las cinco（5時に）など。

6）山、川、海などの名称に付けられる定冠詞　el Tajo（タホ川）、el Mediterráneo（地中海）など。

7）関係代名詞が伴う定冠詞　el que、el cualなど。

8）un poco（少し）、un tanto（なにがしか）など、名詞以外の語句と用いられて慣用句の一部をなしている不定冠詞。

9）数詞の前に用いられて “約” の意味を表すunos、unas（unos cuarenta pasos　約40歩）

また、無冠詞については、スペイン語から日本語への翻訳においては、対象とすることが難しいので本論では扱わないこととする。

0.2. では、前述の4つの作品それぞれに現れる定冠詞、不定冠詞の数と、

それに対して日本語訳において何らかの形で表現されているものの数を比較して見よう。

Recuerdos de niñez（幼き日の思い出）

定冠詞	704	日本語	46	
不定冠詞	177	日本語	68	

La corza blanca（白鹿）

定冠詞	628	日本語	25	
不定冠詞	171	日本語	27	

Platero y yo（プラテロとぼく）

定冠詞	3167	日本語	128	
不定冠詞	695	日本語	168	

Puesta de sol（落日）

定冠詞	674	日本語	49	
不定冠詞	162	日本語	37	

総計

定冠詞	5173	日本語	248	約4.79%
不定冠詞	1205	日本語	300	約24.9%

単純に数字の上からわかることは、スペイン文では定冠詞の使用量が不定冠詞よりも断然多い ── 使用した4作品では、定冠詞の数が不定冠詞の数よりも4倍以上多い ── が、逆に日本語では不定冠詞が何らかの表現のなかで生かされている例の割合は定冠詞の場合よりも約5倍多い。しかし、いずれにせよ、ここで扱う定冠詞、不定冠詞の総数6,378のうち、日本語の中に何らかの形で反映されているものは、たったの548、つまりわずかに約8.6%で、1割にも達していない。いかに、これだけスペイン語で使われている冠詞が、日本語では意味をなしていないか、ということがわかる。

本論では、そのうちの不定冠詞を取り上げて考察を進めるが、日本語訳で

何らかの対応がなされている定冠詞の大部分が照応の定冠詞であり、又それに当てられる日本語のほとんどが指示的な“その、この”であるのに対して、不定冠詞は定冠詞よりも多彩な対応が見られる点、興味深いものがある。

1.0.　スペイン語の不定冠詞un, una（以後un/aと表記する）は、ラテン語の数詞の“1”、(unusの対格形unum, 及びunaの対格形unam）が次第に発達し、文法化したものである。しかし、英語においてはoneとaのように、数詞と不定冠詞が分離しているのに対して、スペイン語のun/aは文法化した暁も依然として数詞であり続け、その陰には常に“1”に関連する意味が存在している。つまり、2、3、4…があり得る1単位を表し、従って他にも同名の存在が予想されることから、同じ名で呼ばれるもの中の任意の1つ、つまり対象が不特定の1単位であることを表す。しかもその名で呼ばれる類に属せしめ得る、という分類的な意味、“1種の”をも持ち得る。また同時に、“1”を使うことによる強調的な働きも持ち、ことに、“ひとつも〜ない”などのような否定文で強調的な作用が顕著である。また、元来単位をなさない量的な対象や抽象的な概念が単位化して捕えられる場合のサインともなる。つまり、un/aの、対象となる名詞に与える作用は、あくまで根本に“1”が生きている“非定”であると言えよう。

2.0.　さて、このようなスペイン語の不定冠詞は、日本語訳において、どのような対応がなされているのであろうか。

0.2.で示した割合を見てもわかるように、完全に文法化している定冠詞に比べ、文法化しても、“1”の意味をあくまで保持しつずける不定冠詞は、日本語になる割合が高く、その表し方もいろいろある。選択した資料では訳が非常にこなれているために、不定冠詞が訳文に反映される割合はまだ低いと思われるが、もしより直訳がなされていれば、その割合はもう少し高くなったとも思われる。

2.1.　資料の日本語訳は、いずれも名訳ではあるが、やはり不定冠詞が日本語訳で何らかの形をとる中で、圧倒的に多いのは、“1つの”あるいはそれに相当する訳語が当てられている場合である。ちなみに、不定冠詞が日本語訳の中で、何らかの形で反映されている300例の中、“1つの”など“1”が用いられている数は177例もあり、約60%を占めている。

2.1.1.　まず、日本語において100パーセント“1”が当てられていると言えるものは、当然ながら、いわゆる数詞と認められる、あるいは数詞的なun/aである。不定冠詞を対象とする本論で数詞を交えるのは問題があるかとも思われるが、前述のように、スペイン語では数詞と不定冠詞は同形であり、その境界を見極めることは難しい。従って、日本語のun/aに対する対処の仕方を問題としている本論では、むしろ数詞を含めてのun/aを扱っても良いかと思われるので、ここではあえて明らかに数詞と見なされるものをも除外しないことにする。

では、まずその“1”と訳される数詞的なun/aの例をあげよう。

1）La tormenta palpitaba sobre el pueblo hacia una hora…(P.XVIII)
（あらしが、1時間もまえから、…、町の上で荒れ狂い…）

2）un duro nada menos！(R.p.30)
（大枚1ドウーロ！）

3）Morimos una vez nada más, …(S.p.64)
（我々はたった1度しか死にません。）

1）のuna hora（1時間）などの時間の単位、2）のun duro（1ドウロ）などのお金の単位、3）のuna vez（1度）のような回数、これらのun/aはおそらく純粋な数詞と認められうるものである。そしてこれらの特徴は日本語の言い回しでも必ず“1～”となり、他のun/aと違って“ひとつの、ひとりの～”“～がひとつ”のようなバリエーションは現れない、またそれ以外の意訳がなされたり、un/aが全く無視されて訳文中に対応がない、ということがないことであろう。

2.1.2.　数詞的な“1”について、“1～”あるいは“1つの”のような形で、資料とした日本語訳に“1”が現れることが比較的多かったのは、元来単位的とは言えない対象、或は複数の対象をひとまとまり、つまり1つの単位としてまとめる場合のun/aである。

2.1.2.1.　そのひとつは時間的な単位である。中でもun momento、un instanteなどは、日本語の“一瞬”という成句表現と合致するせいか、この訳語が当てられている例が多かった。

4）…un momento tiñe de la sangre de Platero. (P.XXXV)
(一瞬、プラテーロの血で染まる…)

5）…, giró verginosamente un momento, …(P.XXVII)
(一瞬きりきり舞いをする。)

6）…me voy un momento, …al cielo. (P.XIV)
(ぼくのからだは一瞬、…、大空高く舞いあがる)

7）…roja　un instante la cara fea por la luz del cigarro, …(P.II)
(葉巻の光で、一瞬そのいかつい顔を照らしながら…)

8）Un instante, se oyó en el silencio …(P.CXXI)
(一瞬、朝の静けさの中に、…，聞こえた。)

9）…un instante, rojo, morado, azul el campo …(P.LXXVI)
(一瞬、赤、紫、青の野原…)

10）Ronsard, olvidado un instante de su soneto …(P.XLVIII)
(ロンサールは、…，あのソネットを一瞬わすれ…)

しかし、un momentoは“一瞬”の他にも、次に示す例に見られるように“一時”、“ちょっと”、“しばらく”、“すぐ”などの訳も当てられている。

11）Un momoento, Platero, vengo a estar con tu muerte.
(P.CXXXVIII)
(一時を、プラテーロ、きみのなきがらのそばで過ごすためにぼくは来たのだよ)

12) Platero lo pensó un momento, …(P.LXXXIX)

(プラテーロはちょっと考えるようだったが)

13) Calló un momento, …(S.p.36)

(彼はちょっと黙った。)

14) …le cuelgan un momento …(P.XXIX)

(しばらくぶらぶらし…)

15) …; perdonadme si he faltado un momento …(C.p.58)

(しばらくお側を離れまして、ご無礼致しました。)

16) Un momento después, …(P.XXXI)

(そのすぐうしろから…)

17) Comprendo todo en un momento. (P.XXXV)

(すぐになにもかもわかった)

また次の例のun momentoは形容詞sorprendidoを伴い、これが“ひょっとした”と訳されて“1”が不要になっている。

18) Por fin en un momento sorprendido, …(P.XXXV)

(ひょっとした瞬間に…やっとのことで…)

また、un instanteは、Corza Blancaでは総て“瞬間”と訳されている。

19) Después de mecerse un instante …(C.72)

(瞬間たゆたうてから…)

20) Este extraño rumor sólo se dejó oír un instante, …(C.p.74)

(この怪しい話し声は瞬間聞こえただけだった。)

同じような時の単位をあらわす語句に“un rato”があるが、これは次例のように、辞書には“ひととき”の訳もあるが、資料とした作品には、“暫時”と“しばらく”の訳語のみが見れれた。

21) Pasamos un rato agradable.（白水）

(私たちは楽しいひとときを過ごした。)

22) …puede haceros pasar un rato divertido refiriendo la causa de sus

continuos sustos. (C.p.10)

(そのわけを話させますれば、暫時のお慰みになろうかと存じます)

23) O pace un rato en ese prado tierno, …(P.XXVIII)

(それともそのやわらかな草原でしばらく草を食べていておくれ)

ということは、勿論訳者の文体論的な好みもあろうが、同じ不定冠詞un/aによって単位化されながらも、前後の関係からその内容がやや異なり、それを日本語の方がむしろ敏感に反映して、あえて"1"を表に出さない訳語を当てているとも言えよう。

なお、時間的な単位としては、他に資料には現れなかったが、una temporada, una pausaなどもあげられよう。

24) Pasamos una temporada en Málaga. (小学)

(私たちは一時期をマラガで過ごした。)

25) Y después de una breve pausa, añadió-：(Chistes)

(そして一瞬黙ってからこう言った。)

2.1.2.2.　やはり単位化のマークとなる不定冠詞が"1"と訳されることが多いのが、実現された一回の動作、行為を表す名詞が伴うun/a、つまり一まとまりの単位としての動作、行動を示すun/aである。訳は"1～"が多いが、"～をひとつ"もある。

"1～"の例から挙げよう。

26) …y en el estómago un valiente trago de vino …(C.p.40)

(酒は威勢よく、胃袋に一ト息にしまってから…)

27) …, se empeñó en querer que diese una chupada al que él estaba fumando. (R.p.71)

(…自分のふかしていた葉巻をしつこく私に一口吸わせようとした…)

28) …y él le descargaba un puñetazo en los hocicos；(C.p.80)

(そこで彼は相手の鼻ずらに一発げんこつをくれるのだった。)

29) …de un salto se puso en la margen del río. (C.p.100)

(一躍して、川岸に飛び出した。)

30) …detuvo su acción con un grito, …(C.p.102)

(一声さけんで、射手の動作を抑えた。)

次の例のように、人間の行う動作ばかりでなく物理的なものもある。

31) …, el Sordito le dio un tiro. (P.LXXXVIII)

(…、〈つんぼさん〉が鉄砲を一発ぶっぱなした。)

“〜をひとつ”の例はあまり多くない。

32) Y el mono, …, da una vuelta de campana …(P.XXXIII)

(…猿が、…, とんぼがえりを一つする…)

33) Platero…ha puesto un interminable rebuzno contra el cenit. (P.CI)

(プラテーロは…いつまでも消えぬ鳴き声を一つ、天高くはなつ。)

また、次のような例もある。

34) Da una palmadita , un salto, y se va silbando, un guiño de los ojos con viruelas, …(P.CXXVII)

(またポンと手をたたき、身をひるがえし、あばた面の目でウインクを一つする…)

つまり例34) では、3つの行為の名詞のうち、“un guiño”は“ウインクを一つ”と“1”を使っているが、una palmaditaは、“ポンと手を一つたたき”でもよいところを、“ポンと手をたたき”と訳され、un salto (一飛び) は“身をひるがえし”となっている。おそらく、訳者はここで1回の動作を表す語句が3つ続くので、それぞれに“1”を当てることを文体論的に避けたのであろう。こういう所に冠詞の制約がない日本語の細やかな表現力を感じさせる。

また次の例では、un súbito silencio (突然の静けさ) のunに対して“一瞬”のような訳がなされている。

35) Hubo un súbito silencio, …(P.CII)

(一瞬、水を打ったような静けさ。)

また、1回の動作、行為をあらわす不定冠詞が、全く訳されていない例も

いくつか見られる。

36) Detrás de las enredaderas sonó una tos. (S.p.16)

(葛藤の後で咳きをきいた。)

従って、不定冠詞が"1～"と訳されないと、例えば上例のuna tosが1回の咳ばらいなのか、何度も咳きをしたのかは、日本語文ではわからないことになる。

37) …y dándole un alpargatazo en el trasero. (R.p.22)

(彼の尻をサンダルでたたいて行けと…)

38) …, le dio luego un beso, …(R.p.22)

(それから彼に接吻して…)

39) …sonó a mismo tiempo un grito…(C.p.104)

(それと同時に、…, 悲鳴が聞こえ、…)

39) のようなunは、1回という動作の回数よりも、"恐らく悲鳴のような声"という分類面に力点が置かれており、訳者も敏感にそれを察知してあえて"1～"と訳していないとも思われる。

なお、資料には無いが、例えばVoy a tomar un baño.のような場合、un bañoの不定冠詞を訳して、"風呂をひと浴びして来ます"あるいは"ひと風呂浴びて来ます"としたほうがよいのか、ただ"風呂を浴びて来ます"のほうが日本語として自然なのか、難しい。どちらも自然だとすれば、訳者の好みの問題となるであろう。

また、動作名詞が伴うun/aが、1回の動作というよりも、一定期間続いた動作、行為を示しているような場合もある。次の例のun respiro (一休み) も後の同格句が示しているように、数日間続いたことがわかる。

40) En un respiro que nos dieron, en unos días de tregua, …(R.p.98)

(私たちに与えられた一休み、つまり休戦の数カ月には…)

上例のun respiroは、"一休み、という日本語の決まり文句に合致するが、このようなun/aは日本語で表すのは難しい場合も多いように思われる。例41) のun moquete (なぐりあい) や42) のun martillazo (槌打ち) なども、

1回のなぐりあいや槌打ちではなく、一定期間続いて繰り返された動作と思われるが、日本語にその“un”を映すのは難しいことであろう。

41) …, siguió un moquete, y ya estaba armada. (R.p.78)

(つずいて殴り合いとなり、もう喧嘩が始まっていた。)

42) …daba un martillazo en el armatoste… (R.p.86)

(…その屋台に槌打ちをくれていた。)

2.1.2.3. やはり、日本語で“1”と訳されることが比較的多いのは、そもそも単位をなさない非単位的な概念や、複数の概念を一まとまりにして捕らえるための前置形容詞句「un/a＋名詞＋de～」を構成している名詞に伴われるun/aである。訳は“1～”、“ひと～”となることが多い。

例えば、43) のun trozo de carne de jabalíでは、本来単位をなさない物質名詞carne de jabalí（猪の肉）を単位化するものである。

43) un trozo de carne de jabalí (C.p.41)

(ひと切れの猪の肉)

残念ながら資料とした4作品中この種の例は43) のみであったが、この形式はun trozo de papel（紙切れ一枚）、una rebanada de pan（一枚のパン）など非常によく見られるものである。

またこのような前置形容詞句は以下の例に見られるように、複数の対象を一つの単位にまとめるのに用いられることも多い。

44) …, se alejó seguida de una tropa de corzas de su color natural, … (C.p.39)

(普通の毛色の鹿が一トむれ、ついて走りました。)

45) …vio Garcés un grupo de bellísimas mujeres, … (C.p.41)

(ガルセスが…見たのは、一群の美しい女たちだった。)

46) …y podría poseer igualmente una flota de yates …

(…ヨットの一船隊でも持つことが出来ましょう…)

このように、この形式は“1～”と訳されている場合が多いが、なかには

un/aが訳に現れないこともある。47）ではun manojo de tendones rígidos（一束のこわばった腱）のun manojoが無視されて、“幾筋かの腱”と訳されている。

47) Por abajo intentaba ocultar un manojo de tendones rígidos. (S.p.8)
（くび飾りの下の方では、こわばった幾筋かの腱をかくそうとつとめていた。）

次の例のun rebaño de cabrasも単に“山羊の群れ”となっている。

48）…, el tintineo de las esquilas de un rebaño de cabras… (S.p.32)
（山羊の群れのちりんちりんと鳴る鈴の音は、…）

2.1.2.4. しかし、非単位的な概念が単位化されて捕らえられていることを示す不定冠詞は、当該の概念が量的、特に質的な概念の場合は、前述の時の名詞は別として、2.1.2.3.で述べたような前置形容詞句の助けをかりない限り、日本語で“1”を当てることは難しいように思われる。

例が少ないので、結論ずけることは勿論出来ないが、まず量の概念が不定冠詞によって単位化されている例からあげよう。いずれも、un/aは日本語には反映されていない。

49）…, las sociedades le enviaban comisiones para saludarle, pidiéndole de paso una subvención. (S.p.20)
（諸官憲は彼に書を送って慈善事業に対する援助を乞うた。）

つまり、una subvenciónは“なにがしかの額の援助金”ということである。又、50）のuna fortunaも同様に、“ある実現された額の財産”ということだが、日本語には現れていない。

50）Después de ganar una fortuna. (S.p.56)
（一度財産を得た後は…）

資料とした作品以外の例を引くと、Pedro le dio una propina.などという場合、不定冠詞無しの“Pedro le dio propina.との区別を日本語で意識すれば、“ペドロは彼になにがしかの（或はいくらかの）チップをやった。”のよ

うになるであろうが、果して、日本語で“なにがしかの（いくらかの）チップ”とただの“チップ”との区別に意味があるかどうか、問題である。

又、最近スペイン語でよく聞かれるようになった“un café”“un té”はどうであろうか。これは2．1．2．3．で述べた前置形容詞句の一つ、una taza de（一杯の）が物質名詞であるcafé又はtéの前で省略された形である。Deme un café. に対して“コーヒーを一杯下さい”が自然なのか、“コーヒーを下さい”が自然なのか、恐らく“コーヒーを下さい”の方が良く聞かれる形ではなかろうか？参考とした、吉本ばなな著“キッチン・満月”では「お茶（コーヒー）を飲む、下さい」のようなせりふが9回使われているが、「一杯」のように「1」を使っているのは1回だけで、あとはすべてただ“お茶”“コーヒー”であった。

では、つぎに抽象的な概念が単独で不定冠詞を伴う例について見てみよう。

51）のuna ilusiónの不定冠詞は、抽象的概念である“幻想”の単位化、つまりilusiónがある内容を持って実現されたことを表すものと思われる。日本語では“ある”と訳されている。

51）Todos avanzamos empujados por una ilusión. (S.p.76)

（誰もかれも、ある幻想に押し動かされて進んでいるのです。）

52）のuna vidaも、不定冠詞は具体化された、一つの長さを持った生涯に区切られた、つまり単位化された生涯を示すものであろう。訳も“一生”となっている。

52）La ilusión estaba muerta desde hacía muchos años : casi una vida. (S.p.92)

（幻想はもう何年も前から、短い一生位も前から消えていたのだった。）

しかし、スペイン語でも、このように抽象的な概念が修飾語も伴わずに不定冠詞を選択する例はあまり多くはないように思われる。上の2つの例では不定冠詞がたまたま日本語に訳されているが、日本語に表されない例もたくさんある筈である。しかし、これも資料中例が少なかったので、今後観察を

続けて見たいと思う。

2.1.3.　日本語訳で“1”が現れることが多い例の一つは“1つも～ない”のような否定に現れるun/aである。そして、日本語の形は例53）の“蠅一匹”のような形式が多い。

53）No se oía una mosca. (R.p.16)

（蠅一匹の音も聞こえなかった。）

54）Ene se adelantó hosco, pero sin derramar una lágrima, …(R.p.16)

（エネはしかめっ面こそしていたが、涙一滴流しもせず…）

55）ni una señal de pesar! (R.p.20)

（苦しい様子一つ見せもしない！）

56）では、“鹿の一頭も、と“の”が入っている。

56）…hasta el extremo de no encontrarse un venado en ellos ni por un ojo de la cara. (C.p.24)

（鹿の一頭も、尻尾のはし切れさえも見られねえまでに…）

なお、同じ56）の中のni por un ojo（直訳では“顔についている目一つさえも”）の方は否定の強めの役を果す慣用句であるために、“しっぽのはし切れさえも”と意訳されている。

57）では逆に、“一本の木も”となっているが、日本語ではこの方が“木の一本も”よりも言い回しとして自然であろう。

57）Aunque no hay un solo arbol, …(P.XLII)

（そこには一本の木もないけれど…）

つぎの例の“一言も”は日本語の決まり文句と言えよう。

58）Este había ya muerto hacía bastante tiempo, sin decir una sola palabra…(C.p.50)

（その人も何年も前に他界し…ひとこともらさなかったのである。）

また、人に対しては“誰一人として”の訳が見られる。

59）…no existía un invernante superior a él, …(S.p.18)

（誰一人として彼にまさる避寒客はいなかった）

もちろん、つぎの例のように、意訳されて“1”が現れない場合もある。

60) Ni una descripción sería mereces, tú, …？（P.LV）

（君は、まじめに述べてもらうだけの値打ちがない、とでも言うのか？）

前述のように、このような否定に現れる不定冠詞は、強調的な用法の一つと思われるが、次に否定以外での強調的不定冠詞が日本語でも“1”で表される例を挙げよう。

例61）のuna pieza sola de mármolはスペイン語でsolaがつけられているので更に強調が深まっているが、日本語の方も“一枚岩”のような訳が当てられている。

61) …tiene el brocal esculpido en una pieza sola de mármol alabastino.

(P.XXVI)

（アラバスターのような真っ白な大理石の、一枚岩をくりぬいたものだ。）

白水社の現代スペイン語辞典には次のような強調の不定冠詞の例がのっているが、この中のpaciencia（忍耐）が伴うunaには“なんとも”という訳がつけられている。

62) Necesito una paciencia.（白水）

（なんとも忍耐が必要だ。）

これも例が少ないのが残念だが、このような強調の不定冠詞に対しては、日本語でも何らかの対応が見られることが多いように思われる。

2.1.4.　その他、un/aが日本語訳の上でなんらかの形で現れる場合として、2.1.2.2.、2.1.2.3.、2.1.3.で扱った例とも重なるところがあるが、いわゆる不特定の1単位をあらわす場合が挙げられる。

2.1.4.1.　当該の名詞が、完全な不特定の単位、つまり紹介導入の対象ではない、現実の裏付けのない“その名で呼ばれるものの任意のひとつ”という

場合から考察してみよう。

資料とした作品では、“1～”、“ひとつの”、“一人の”或はそれに類する“1”が使われる表現は、比較的少なかった。

63) Mi tercer deseo, …, fue conseguir una mujer igual a la duquesa de Pontecorvo, …(S.p.82)

(第三の願いとして、…, それはポンテコルボ公爵夫人と、等しい一婦人…をかちえたいと祈念したものです。)

64) …, hemos de ver el pájaro salir del corazón de una rosa blanca. (P.LXXXIII)

(…一輪の白ばらのまん中から、あの小鳥がとび出してくるのが、きっと見えるにちがいない。)

次の例で、“一冊の本”といっているのは現実の描写ではなく、想像の世界での“本”であり、要するに任意の一冊である。

65) …; sino en la colina roja, …, mirando con un libro en la mano, ponerse el sol sobre el río …(P.LXXXIV)

(…あの丘の上で、一冊の本を手にして、河にはえる落日をながめているのだよ。)

次の例は聖週間でいつも繰り返される情景の描写だが、“一人の”と言っているのは、勿論実在の裏付けのある人物ではなく、“二人でも三人でもなく一人”の意味で用いられており、任意の“一人”というよりも、かなり数詞的な感じを受ける。

66) Delante de cada bulto un hombre, el jefe de los portadores, … (R.p.86)

(各人形の前には担ぎ手達の長である一人の男がいて…)

次の例の“人ひとり”についても同じことが言える。

67) …crecían unas matas de lentisco altas lo bastante para ocultar a un hombre echado en tierra. (C.p.68)

（…乳香が茂って、地べたにしゃがんだ人ひとり隠れるほどの高さだった）

しかし、完全に不特定な単位を示す不定冠詞は、“1”を用いるよりも“なにか”の訳が多く見られた。

68) Y si ve una flor o un pajarillo, …(P.XLI)

（なにかの花や小鳥を見かけると…）

なお、上の例のun pajarilloのunの方は日本語になっていない。

69) …, pero que a Platero había que darle un premio. (P.CXXI)

（でもプラテロにも、何か賞品をあげなければいけないよ。）

また、場所の名詞にたいしては、“どこか”という訳が当てられている。

70) …e ir a coger sitio al balcón de una casa amiga, …(R.p.86)

（どこか親しい家の出窓へ行って席をとり…）

71) …y golpea con indolente fuerza el pandero, mirando a un balcón. (P.XXXIII)

（…どこかのバルコニーを見上げながら、気のなさそうにタンバリンを鳴らす。）

72) Tal vez una bandera española sobre el cielo azul de una plaza de toros…(P.LVIII)

（それは多分どこかの闘牛場の…（そんな闘牛場で、）青い空に掲げられたスペインの国旗といったところだ。）

上例のuna bandera española（スペインの国旗）も任意の一単位だが、日本語に対応はない。

つまり、不特定の任意の単位をあらわすun/aは日本語には現れない場合も数多い。

以下、日本語に対応の無い例をいくつか挙げよう。

73) …; o está llena, …, del agua clara de una nube de verano; ya consiente el robo de una abeja o el voluble adorno de una mariposa. (P.L.)

（ある時は、…、夏雲から降った澄んだ雨水をいっぱいためているよ。またある時は蜜蜂が蜜を吸いとったり、蝶がひらひらたわむれるのをゆるしているね。）

74) Es la existencia inquieta del militar que manda una plaza en torno de la cual rondan incesantemente de enemigos… (S.p.44)

（それは絶えず敵にうかがわれている要塞を指揮する不安な生活そのままでございます。）

75) …; parece la obra de un loco o… (S.p.68)

（狂人の仕業か、または…と見えます。）

76) Vuelan mudas, …, como andan las hormigas cuando un niño les pisotea el camino. (P.XIII)

（だまりこくって、ただ…飛んでいる。ちょうどこどもに道をふみにじられた蟻たちのように。）

なお、興味深いことは、2.1.4.2.で見る実在の裏付けのある不特定の単位に対しては、“ある〜”という訳が多く見られたが、この場合はひとつの例もなかったことである。

2.1.4.2.　同じように不特定の単位ではあるが、現実の裏付けがあり、聞き手に取って知られていないが、話し手にとっては知られている（時には知られていない場合もあるが）、という紹介導入の対象が伴うun/aはどうであろう。この場合も日本語には対応がない例が圧倒的に多いが、なんらかの形をとって現れる場合のほとんどは、“1”及びそれに準ずる形、または“ある”及びそれに準ずる形である。

2.1.4.2.1.　“1”又はそれに準ずる形を取るものは、“一つの”、“一人の”、“〜がひとつ”“〜が一人（本、輪、羽、匹、枚、台、房、叟…”となるものがほとんどである。

資料が文学作品であるせいか、“一つの〜”は比較的例が少なく、扱った資

料中Corza blancaに見られる、次の2例のみであった。

77) …tuvo que acogerse, durante las horas de la siesta, a una cañada… (C.p.8)

(昼寝の時間になると、ひとつの谷間で、憩いをとらねばならなかった)

78) El río …venía , …, a entrar en la cañada por una vertiente, …

(川は、ひとつの斜面から、ここの谷間にはいり…)

しかし、次に挙げる例にみられるように、“1”のあとに、“本”“羽”などを付けた“一本の～”、“一羽の～”式の形は非常に多かった。

79) …tuvo que agarrarse al tronco de un árbol para no caer a tierra. (C.p.104)

(一本の木につかまって倒れようとするわが身をささえた。)

80) …cojimos a un pobre gato… (R.p.26)

(私たちが一匹のあわれな猫を捕まえて…)

81) Cantaba un pájaro en el solitario umbral, … (P.XVII)

(一羽の小鳥がそのわびしげな入り口でさえずっていた。)

82) …; el río, con un barco que no acaba de entrar; (P.XXI)

(一隻の舟がまだ河口からはいりきらないでいる河も。)

83) Un velo parecía enlutecer el sol; (P.XXVII)

(一枚のベールが太陽をおおい)

84) …, encendía el picante sol un claro y sano racimo de ambar … (P.LXXII)

(つきさすような日の光が、明るくすこやかなこはくいろの一房を…, つややかに照らしていた。)

85) En un rinconcito de un cuarto oscuro, … (R.p.10)

(…日の当たった事もないうす暗い一室の片隅に、…)

しかし、同じ型式でも“一人の～”という訳は比較的少なかった。

86) Un hombre había invadido sus dominios y estaba contemplando el inmenso paisaje., … (S.p.16)

（一人の男が彼女の領域に浸入して、大景を…見眺めていた。）

87）…tuerce la esquina un hombre solitario…（P.LXXIII)

（ぽつねんと一人の男が角をまがる…）

88）…las mujeres me dijeron que un negrito preguntaba por mi.
(P.LXXIV)

（…ひとりの黒人の少年がぼくをさがしている、と女たちが知らせてくれた。）

また“〜が一頭（本、羽…）.”の形での訳も非常に多くみられた。

89）…una corza blanca como la nieve salió de entre las mismas matas…
(C.p.38)

（雪のように真っ白な野呂鹿が一頭、飛び出したのでございます。）

90）Venía el Señor…y frente a Jesús un árbol de verdad, no de chancitas.（R.p.88)

（…主の像がやって来た。…イエスの前にはひやかしでない本物の木が一本植えてあった。）

91）Ya tiene a su lado un pajarillo, …（P.L.)

（ある時は、そのそばに、小鳥が一羽おりているが、…）

92）una niña forastera, …, canta entonadamente …（P.III)

（よそ者の少女がひとり…調子よく歌う）

93）Veo a Montemayor mirando una escama de pescado contra el sol, …（P.XCIII)

（僕は、モンテマヨールが…魚のうろこを一枚、日にかざしてのぞきこんいるのを見つける）

94）Solo una casa hay, blanca y azul, …（P.XCIX)

（…白と青の家がたった一軒あるだけだ。）

上の形にたいして、“〜がひとつ”は資料とした三作品中Corza blancaとRecuerdo de mi niñezには現れなかったが、Puesta de solまたPlatero y yoにはかなり見られた。これは、訳者の文体的な好みもあろうかと思われる。

95) Me estrelló una breva en la frente. (P.IX)

(ぼくのひたいでいちじくが一つ炸裂した。)

96) …, ha abierto, …, una flor azul de olor penetrante. (P.LII)

(香りのつよい青い花が一つのぞいているよ)

97) Una estrella fugaz corre medio cielo… (P.LXVI)

(流れ星が一つ、空のまんなかを落下し…)

98) En el río, una velita blanca se eterniza, … (P.LVII)

(川には、小さな白帆が一つ、…, いつまでも動かない。)

99) …a lo largo de mi historia existe una de esas ilusiones, un deseo que me ha devuelto la energía. (S.p.76)

(私の一生につきまとったそういう幻想、即ち願望は一つあったのです。)

100) …revolaba una bella mariposa de tres colores… (P.CXXXII)

(三色の美しい蝶が一つ、飛び回っていた…)

101) Un gran nube negra、…puso la luna sobre una colina.

(P.LXXVIII)

(大きな黒雲が一つ、…, 丘の上にいま月を生み落とした。)

2.1.4.2. つぎに、紹介導入の対象となる名詞が伴うun/aが、"ある"と訳される場合について考察してみよう。日本語では"1つ"と"ある"には微妙な、あるいはかなりの差が感じられる場合が多いが、スペイン語では同じun/aである。例えば、同じun díaでも、日本語で言う"1日"と"ある日"とは全く異なる。この意味では、スペイン語の冠詞の持つ含みの幅にに対して、日本語のむしろ細やかな表現力は冠詞の与えるニュアンスを十分に補って足りているように思われる。

特に、un/aが"ある"と訳されることが非常に多いのは、día(日)やtarde(午後)のような、時の名詞が伴う場合である。

102) …una mañana llegó acongojada su madre… (R.p.12)

(ある朝彼の母親が悲嘆の様子でやって来て、…)

103) Y un dĭa, …, supimos que habĭa muerto. (R.p.68)

(ある日、私たちは彼が死んだということを知って, …)

104) Un dĭa el canario verde, …, volŏ de su jaula. (P.XXX)

(ある日、緑のカナリヤが、…, 籠の中から飛び出した。)

105) Al fin, una noche me la trajo. (P.LX)

(ついにある夜、それは届けられた。)

106) …estando yo una tarde grana en la viña del arroyo, …(P.LXXIV)

(えんじ色のある午後、ぼくは小川のほとりのぶどう畑にいた。)

107) …en un crepŭsculo invernal, tornaba, …, al Molino de viento, a su cueva sin alquiler, …(P.XCIV)

(ある冬の夕暮れに、…, "風車小屋"の、自分のほら穴へ帰っていった…)

108) …una tarde de primavera…(P.XCVII)

(ある春の日の午後…)

しかし、次のように、una tardeが"いつかの午後"とやや変わった訳がなされている場合もひとつだけあった。

109) Una tarde, …, me vi al ciego dando palos a diestro y siniestro tras la pobre burra, …(CXIX)

(いつかの午後、…, あの盲人があわれなろばを追いかけて、棒をめちゃくちゃにふりまわしているのを見た。)

時の名詞以外の名詞がun/aを伴って、"ある"と訳されている例もかなりある。スペイン語の不定冠詞は単位の印である上に、"定"に対する不特定の意味も兼ね備えているのであるから、"ある"と訳されて当然である。そしてこの"ある～"の訳は、2.1.4.1.で扱った任意の不特定の単位に対しては、資料とした4作品中ひとつも例がなかったのに対して、現実の裏付けのある不

特定の単位の方には次にあげるように、かなりたくさんの例が見られた。

110) En un pequeño lugar de Aragón …(C.p.6)

(アラゴンのある小さな村に…)

111) Según me dijo un preste de Tarazona…(C.p.20)

(タラソナのある僧正さまのところに参りましたところ…)

112) …mi padre conversaba en francés con un francés, …(R.p.8)

(…父があるフランス人とフランス語で話をしていた…)

113) -él había venido de una provincia lejana-, …(R.p.22)

(―じつは彼はある遠い地方から来ていた―)

114) …una cosa ha salido como Dios quiere …(R.p.42)

(…あることが神のおぼしめしのままに運んだ…)

115) Esto de repetir el nombre de una cosa delante de ellea …(R.p.54)

(このようにある物の前でその名前を繰り返すということ…)

116) Un famoso escritor dice que …(R.p.58)

(ある名高い作家の言によれば…)

117) …cantábamos en un juego : amagar y no dar!(R.p.66)

(私たちはある遊びで「ぶつまねしてぶちっこなーし!」と歌っていた…)

118) …la novedad de un convidado, …(R.p.84)

(…変わったことと言えば、ある招待客が…)

119) …fui al teatro, …, llevado a un palco por una familia amiga.

(R.p.94)

(私は、…, ある親しい家族に桟敷へ連れられて行った…)

120) Leo en un diccionario : (P.LV)

(ある辞書をひいてみると、…)

121) …, al atravesar el piso interior de una casa blanca, …(S.p.2)

(ある白い家の階下を横切る時には、…)

122) …, por haberselo oído mencionar en una reunión! (S.p.36)

(ある会合で彼女の話を聞いたからといって…)

次の例では、“ある一少年”のように、“ある”と“1”と両方使って訳している。

123) Asocié a mi agiotaje a un chico de puños, …(R.p.46)

(…腕力のあるある一少年を私の投機業に加入させる。)

次の例でも同じように“ある”と“1”とを使っている。

124) …el corazón se llena, …, de un nombre, …(P.XLII)

(胸の中はある一つの名前でいっぱいになり…)

また、次の例では、una madreを“どこかの母親”と訳しているが、内容から見てこの“母親”はかなり不定性の高い存在のようであり、そのことが“どこかの”という訳でよく表されているように思われる。日本語の表現の緻密さがよくわかる例ではなかろうか？

125)…, según ese chiquillo, hijo de una madre que la conoció sin duda, yo soy más tonto que Pinito. (P.XCIV)

(ピニートをきっとよく知っているどこかの母親の、息子にちがいないあの男の子によれば、ぼくはピニートよりももっとばかだというのだよ、…)

しかし、125) は別として、以上あげた例を見ると、いずれもun/aを日本語訳に表さないと意味が不明瞭となり、一方“一つの”あるいは“～の一つ”のような訳は不適当で、やはり“ある～”と訳すのが一番妥当のように思われる。

2.1.4.3.　しかし、実際のところ、紹介導入の不定冠詞はほとんど日本語には訳されていない。つまり、日本語では“一つの”のような単位を示す言葉、或は“ある”のような不特定を表す言葉は伝達上あまり必要ではないのであろうか？

次に挙げる例は“～がある”というような典型的な紹介導入の形をとっているものであるが、いずれも不定冠詞は訳されていない。

126) …, vivía retirado en su torre señorial un famoso caballero llamado don Dionis, …(C.p.6)

(…ドン・デイオニスという名将が、その厳しい城砦に引退して暮らしていた。)

127) Mira : tiene una galería larga, y luego un cuarto pequeñito. (P> XXVI)

(それはね、長い地下道があってそれから小さな部屋になっている。)

128) Había por allí un bebedero umbrío, y unos muchachos traidores les tenían puesta una red a los pájaros. (P.XXXII)

(そのあたりは、日蔭に水飲み場があり、いたずらに坊主どもが、小鳥をつかまえる網を張ってあった。)

129) Había también un relo de pesas y sobre una cómoda una bolsa verde… (R.p.32)

(そこにはまた分銅時計があり、又単笥の上に緑色の袋があって，…)

以下同じように、紹介導入に不定冠詞が日本語で全く無視されている例をいくつかあげよう。

130) una niña, …, lloraba sobre una rueda, … (P/XXXVII)

(…少女が、…，車輪にすがって泣いていた…)

131) Me he echado yo bajo un pino, he sacado de la alforja moruna un breve libro… (P.XLVIII)

(ぼくは松の木の下に横たわり、アラビア風の鞍袋から小さな本をとり出し…)

132) De pronto, sin matices, rompe el silencio de la calle el seco redoble de un tamborcillo. (P.XLIX)

(突然、小さな太鼓のかわいたはげしい音が、通りの静けさを、そっけない調子で破る。)

又、次の例のように、かなり意訳されて、スペイン語の不定冠詞の存在が抹殺されてしまっている場合も見られる。

133）-Me sucede una cosa muy extraña -…(C.p.36)

（どうも不思議なことでごぜえます）

134）…había tenido por madre a una gitana.(C.p.48)

（…母親はジプシーであるとのことだった。）

たしかに、不定冠詞が日本語に訳されないと、当該の対象が“ひとつ（一人）”なのか、複数なのか明らかでなくなる。

例えば、どの例についても言えると思うが、次の例でも、巣をかけているgolondrina（燕）が、１羽なのか複数なのかは日本語ではわからない。

135）Una golondrina tiene, más abajo, el nido.(P.LII)

（その下には、つばめが巣をかけているね。）

しかし、また確かに当該の名詞が伴っている形容詞句や文脈が理解の助けとなる場合も多い。例えば次の例のhija pequeña（幼い娘）は、“幼い”を伴うことによって“大勢”とう印象をまぬかれているし、又、前置詞のcon（～と共に）を“抱いて”と訳したことによって、“ひとり”である意味がますますはっきりする。

136）…, marchóse a Palestina, …, para volver …con una hija pequeña, nacida sin duda en aquellos países remotos.(C.p.50)

（パレスチーナに渡って、…, その遠い国でもうけたらしい幼い娘を抱いて帰り…）

137）でも日本語訳で“１”は表されていないが、大体前後の関係から“単一”であることがわかる。つまりun antiguo servidor（古くからの家臣）がunが訳されてないことで何人かわからなくても、そのhijo（息子）というからには当該の“家臣”は一人に決まっていることになる。

137）…hijo de un antiguo servidor de la familia…(C.p.42)

（旧くからの家臣の子息で…）

勿論、スペイン語の不定冠詞は“１”ばかりでなく、“非定”をもあらわしているわけだから、137）のun antiguo servidorは、“旧くからの家臣の一人”と訳すこともできよう。

しかし、いずれにせよ、不定冠詞を訳さない場合が圧倒的に多いからには、数や定、不定の曖昧さの問題は始終起こり得る筈であるが、翻訳を読んでいてその点についてほとんど気にならないことも確かである。

2.3. スペイン語の不定冠詞は、前述のように常に分類的な機能をも合わせ持っていると言えるが、その中でも特に分類的機能を発揮しているような不定冠詞を伴う名詞は、日本語ではどのように訳されているであろうか？

なお、特に分類的機能を発揮している不定冠詞とは、筆者は次のような場合を考えている。

1．本来不定冠詞とは折り合わない非単位的な概念が、修飾語句を伴って不定冠詞をとっている場合。時によっては修飾語句を伴わない場合もある。

2．本来定冠詞をとるべき唯一物名詞（限定された範囲内での唯一物をも含めて）が修飾語句を伴うことで不定冠詞をとる場合。時によっては修飾語句を伴わない場合もある。

3．当該の名詞が、文脈上すでに限定されているにも拘わらず、修飾語句を伴って不定冠詞をとる場合。

又、文脈上すでに限定されている概念にたいして、分類的に言い直しが行われて不定冠詞をとる場合。

4．環境上無冠詞が要求されている名詞が修飾語句を伴うことによって、不定冠詞をとる場合。

資料とした4作品が文学作品であったということもあるが、un/aが分類の不定冠詞と見なし得るものが圧倒的に多かった。そして、また不定冠詞中最も日本語に対応が無かったのが、この分類の不定冠詞であった。

ではまずなんらかの形で日本語に対応が見られる例をあげよう。

2.3.1. “さながら”、“まるで”、“～ように”、“なるもの”、“みたい”、“らしい”、“～風”、“なにか” などのような語が当てられている場合がかなり見

られたが、これは譬えとして出された名詞が伴う不定冠詞の場合が多かった。

138) Repartía cañazos, …, que era una bendición. (R.p.10)
(彼は、…，祝福さながらに鞭打ちをわかち与えるのだった。)

139) …como la mano más pura de una musa. (P.XLV)
(…さながらミューズのいとも清らかな手のように…)

140) Se diría el cielo un mundo de niños ; (P.CXX)
(空はまるでこどもの世界みたいだ。)

141) …me parecía un ojo de cristal, …(P.CXXV)
(…まるでガラスの目玉のように、…，ぼくには見えたものだ。)

142) A lo lejos, una cinta de mar, brillante, incolora, vibra…
(P.XXXIV)
(はるかかなたの海がリボンのように、はっきりしない色できらきらゆれ…)

143) La entrada del otoño es para mí, Platero, un perro atado ladrando limpia y largamente, …(P.LXXXVI)
(秋のはじめというのはね、プラテーロ、…つながれて、澄んだ声でながながとほえつづける犬のように感じられるのだよ…)

144) ¡Qué cosa más augusta era un castigo público ! (R.p.12)
(公開懲罰なるものがいかに厳粛なものであったことか！)

145) …, un Caín borracho que dice cosas sin sentido a nuestro paso…
(P.CXXVIII)
(…その酔っ払いのカインみたいな男は、ぼくたちがそばを通るとき、…，わけのわからないことをつぶやくが…)

146) Sus pupilas dotadas de una tenacidad imperturbable…(S.p.30)
(一歩も譲らぬといった風の頑固さを備えたその瞳は…)

147) …con una expresión de incredulidad. (S.p.80)

(それを信じないといった風の表情をして…)

148) …el vigor intacto de un hombre de pelea. (S.p.70)

(奮闘家らしい溌剌たる元気…)

149) …tuve un horror instintivo al apólogo, …(P.CXXV)

(…寓話というものにたいして、…, なにか本能的な恐怖をいだいたものだよ)

なお、como, igual a, lo mismo queなど、それ自身が"〜のような"の意味を持つ語句とともに用いられている場合は、以下の例に見られるような、"〜みたい"、"〜ように"、などの訳は分類の不定冠詞に対するものというよりも、前述のような語句に対応するものとも言えよう。

150) …era como un jardín avanzado sobre el mar…(S.p.14)

(海上に突き出した庭園のように…)

151) Iba como un libro descuadernado. (P.XV)

(彼はまるでばらばらにほぐれた一冊の本みたいだった。)

152) …y no volverá a ser, como una melodía dulce y moribundo, como un perfume casi desvanecido. (S.p.16)

(甘美にしてかつまさに絶えなんとする韻律のごとく、または縹さとしてほとんど消え失せてしまった香のごとくに、…, 永遠にさってまたもどらない…)

153) Nuestra vida es igual a un negocio disparatado; (S.p.68)

(我々の生活はむちゃな事業のようなもので、…)

154) Es tierno y mimoso igual que niño, que una niña…; (P.I)

(かわいらしくて甘えん坊だ、男の子見たい、女の子みたいに…)

2.3.2. 分類の不定冠詞にたいして日本語でも"1〜"、"1つの"、など"1"が用いられている場合もある。

155) …y en el fondo una manera de atesorar riqueza disponible, …

(R.p.38)

（根底においては、…いざという場合に売ったり質入れしたり出来るものを貯蓄する一手段であったから。）

156）…lo hubiera recibido entonces como la audacia inaudita de un extranjero desconocido, pobre y rudo. (S.p.90)

（彼女はそれを貧しい粗野な、未知の１外国人の前代未聞の大胆として受け取ったであろう。）

157）¿Ni una descripción seria mereces, tú, cuya descripción cierta sería un cuento de primavera? (P.LV)

（君は、まじめに述べてもらうだけの値打がない、とでもいうのか？きみをちゃんと描けば一編の青春物語ともなろうものを。）

“ひとつの”、“一人の” という訳はあまり見られなかったが、161)，162)，163）はその僅かな例である。

158）…halló un engaño deleitable. (P.CXXIII)

（…ぼくの心をたのしませる一つの夢を発見した。）

159）-Es una desgracia-… (S.p.34)

（一つの不幸ですよ。）

160）Era un cazador furtivo de esos que cazan venados en el coto de Doñana. (P.XX)

（その男はドニアーナの無断狩猟禁止地区で鹿を取る密猟者の一人だった。）

分類の不定冠詞であるから、“一種の” の訳はかなり多く見られた。

161）Una vanidad igual a la de los exploradores de tierras misteriosas… (S.p.4)

（神秘的な土地の探検者たちが感じるのと同じような一種の虚栄心のために…）

162）…afirmaban con un temblor de emoción: (S.p.22)

（事業の通暁者たちは感動から来る一種の戦慄をもって…）

163) …se les puede hacer maniobrar en una especie de circo…(R.p.56)
(一種のサーカスの中で…芸当をさせることが出来る。)

又、分類の不定冠詞に対する日本語訳の特徴は、翻訳上のいろいろな工夫がなされていることである。

例えば、次の例のun morado lívido（一種の暗いような紫）を“青黒味を帯びた紫色”と訳しているのも、その工夫のひとつと思われる。

164) …era en el presente un morado lívido. (S.p.8)
(今では青黒味を帯びた紫色になっていた。)

165) では、una aurora（一種の曙光）を“あかね色”と解釈している。

165) Fue como si el sol de la tarde, …, al ponerse entre las nubes de agua, …, le encendiese una aurora… (P.XXXVII)
(ちょうど夕日が雨雲の中に沈むとき…，あかね色でパット照らしたかのようだった。)

つまり、この二つのような例は不定冠詞そのものを訳しているのではないが、不定冠詞が暗示するものを日本語の表現にうまく取り入れているもので、このあたりが翻訳家の文学的技量の発揮どころと言えるかも知れない。

2.3.3. では、分類の不定冠詞中、特に日本語になりにくいものとは、どんなものがあるのか、見てみよう。

2.3.3.1. 最も日本語になりにくい、と思われるのは唯一物が伴う不定冠詞である。唯一物はたとえ単位はなしていても数えられず、原則的に定冠詞と結び付くものであるので、これが伴う不定冠詞は単位の印ではなく、純粋に分類的なものと言える。

次の例のsuelo（大地）は単位はなしていないが、mar（海）やcielo（空）と同様、分割出来ない全体を指す名詞で、元来唯一物名詞として定冠詞と結び付くのが普通である。（なお物質名詞化して無冠詞になることもある。）こ

こでは修飾語のoscuro（暗い）を伴って分類されているため、不定冠詞を伴っているが、不定冠詞は日本語に表されていない。

166）…, y si se la coloca sobre un suelo oscuro no se ve la trampa…

(R.p.58)

（もしそれを黒ずんだ地面におくと、仕掛けが見えなくて、…）

しかし、残念ながら資料とした4作品の中には唯一物名詞が分類の不定冠詞を伴う例はこれしかなかった。ほかから例を引けば、bajo un cielo sin nubes（雲一つない空）のような場合、cielo（空）は172）のsueloと同様、原則として定冠詞と用いられるのが普通だが、この場合sin nubes（雲一つない）を伴うことによって、分類の不定冠詞を伴っている。しかし、これを“雲一つない一つの（或は一種の）空の下で”などと訳しては日本語らしさは失われてしまう。参考として、引用した吉本ばななの“キッチン”に“まだ若い月”というのがあるが、スペイン語訳では、una luna todavía creciente と、分類の不定冠詞を伴って表されている。

なお、次に挙げる例のように、como（～のような）を伴っている場合、訳は“～のように”となるのは、2.3.1.で述べたように、むしろ接続詞のcomoが日本語になっていると言えよう。

167）…Vibra la hora de mayo, ardiente y clara como un sol por dentro.

(P.XLIV)

（五月の時間が、まるで太陽の内側のように、明るく燃えて振動する。）

2.3.3.2.　同様に、抽象名詞、物質名詞などの不可算名詞が伴う不定冠詞も日本語になりにくいように思われる。従って、2.3.2.の例文中で見た144）のun castigo público（公開懲罰なるもの）、149）のun horror instintivo（なにか本能的な恐怖）、158）のun engaño deleitable（ぼくの心を楽しませるひとつの夢）などは、日本語に訳されている、数少ない例と言えよう。

次にあげる例のun agudo troteの伴う不定冠詞も純粋に分類の不定冠詞で、“1”をあらわさないものである。何故ならば、形容詞agudoがなけれ

ば、en trote（速足で）と無冠詞になる筈だからである。日本語では勿論unは訳されていない。

168) …subimos, en un agudo trote, al pinar. (P. XXXII)
（荒々しい早足で、松林に向かってのぼっていった。）

169）のfuego（火）も同様に“1”とは相入れない名詞であるが、ここではvivo（激しい）という修飾語を伴うことで分類の不定冠詞をとっている。日本語はかなり意訳である。

169) En sus ojos nuevos rojeaba a veces un fuego vivo, …(P. XV)
（彼の若々しい目には、…ときたま真っ赤な火がチロリチロリと燃えた…）

次の例のun pan de trigoの伴う不定冠詞も明らかにde trigoを伴うことによる分類のものである。何故ならば、panは物質名詞で本来不定冠詞と結び付きにくいものだからである。従って、un pan de trigoは“小麦のパンみたい”の意味で、訳の“1かたまりのパン”はむしろ意訳であろう。

170) No ; el alma de Moguer es el pan. Moguer es igual que un pan de trigo. (P. XXXVIII)
（でもそれはちがう。モゲールの魂はパンなのだよ。モゲールは一かたまりの小麦のパンみたい。）

次に、抽象名詞の場合の例をいくつか挙げよう。勿論日本語には不定冠詞は反映していない。

171) Tenía la duquesa la flacida obesidad de una vejez que se resiste a la momificación, …(S. p. 4)
（公爵夫人はみいらのような痩せさらばいに抵抗するかのように、だるそにぶくぶく太った老体をしていたので…）

172) El Mediterráneo era de un suave azul, mate y sin reflejos, …
(S. p. 32)
（地中海はつやと反射のない淡青色をたたえて…）

173) …corría un riachuelo, saltando de roca en roca con

un ruído manso y agradable. (C.p.8)

(一筋の小川が流れて、水は穏やかにせんせんと音をたてながら岩から岩へ飛びはねていた。)

174) …, oí una nueva voz fresca, delgada y vibrante, …(C.p.34)

(…甲高い、さえざえとしたよく響く声がまた聞こえましたのでごぜえます。)

175) …don Dionis tuvo una vida bastante azarosa en su juventud, … (C.p.48)

(ドン・デイオニスは若いころ、かなり動きの多い生活を送り…)

176) Alguna de ellas se asombró de un modo indecible y…(R.p.58)

(その中のある者は、言いようもなくびっくりして，…)

177) Yo los vi anoche, fijos como por una fuerza sobrenatural en el aire, …(P.VIII)

(ゆうべぼくは、それらのユダがまるで超自然の力でささえられたみたいに，空中に…見かけた。)

178) Con una solicitud mayor, sin duda, que la del viejo Darbon, … (P.XII)

(ぼくはもちろん，プラテーロのかかりつけの医師ダルボン老人などよりもずっと気をつかって…)

形容詞を伴わなくても、勿論分類の不定冠詞は存在する。次の例のuna ilusiónのilusiónは不可算的抽象名詞であり、不定冠詞とはあいいれにくい名詞であるが、ここは分類的な意味での不定冠詞を伴っている。そして、ここでは、どんなilusiónか、という形容詞が表すべき内容を恐らく後につづく“…”が表していると思えるが、日本語にこれを訳すのは難しいであろう。従って、訳文のほうの“…”は原文の“…”とは意味が違っていると言えよう。

179) También solo, como la esperanza, o con una ilusión … (P.XXXVIII)

(それからまた、希望のようにひとりぼっちのパンやら、幻想といっしょのパンやらも…)

しかし、このように1単位から離れた、純粋に分類的な不定冠詞は日本語に訳されなくても、ほとんど理解の上での混乱はないように思われる。

2.4. スペイン語の不定冠詞un/aが一資料とした作品中例はそう多くないが一殆ど日本語に訳されていた場合の1つに、“二つのうちの一つ”つまり“片方”という場合がある。これは、日本語の言い回しとしてもごく自然で、文語ばかりでなく口語でもよく用いられる形であるから、当然であろう。

2.4.1. この形は特に双数名詞の“2つのうちの1つ”、という場合が多い。この場合は、ほとんどが“片～”の形で訳されている。

180) …con una rodilla en tierra, extendiendo un brazo a Cristo … (R.p.88)

(…片膝を地に立て、片腕をキリストの方に伸ばして、…)

181) …y el cazador traía el tiro en un brazo. (P.XX)

(猟師は片腕に弾をぶちこんでいた。)

182) Platero la miraba fijamente y sacudía, …, una oreja. (P.LXXVIII)

(プラテーロはじっと月を見つめ、片方のやわらかな耳を振って、…)

183) Platero llevaba la merienda y los sombreros de las niñas en un cobujón del seroncillo, y en el otro, …, a Blanca. (P.XC)

(プラテーロは、荷鞍につけた片方の籠に、おべんとうと女の子たちの帽子を入れ、もう片方の籠には、…, ブランカをのせていた。)

184) Voy yo con Platero, lentamente, a un lado cada uno de los poyos de la plaza de las Monjas, … (P.CXXVI)

(ぼくはプラテーロといっしょに、“修道女広場”にあるベンチの一つひとつの片側を、ゆっくりと歩いてゆく。)

185) …y dejó una mano arrodillada… (P. CXXXII)

(片方の前足を折り曲げた。)

186) La anciana se había apoyado en un brazo de él… (S. p. 94)

(老婦人はいつの間にか彼の片腕によりかかっていた。)

双数名詞とは限らず、何らかの限定を受けている二つのもののうちの一つ、という場合も当然有り得るが、次の例では、二つある扉の片方について、"こちらの"と訳している。

187) Yo entraba en Almirante por una puerta y salía por la otra…
(P. LXXII)

(ぼくは愛馬アルミランに乗って、こちらの戸口から入ってゆき、あちらの戸口から出てきたものだよ。)

2.4.2.　また、限定された複数の対象の中のひとつ、つまり"one of＋複数名詞"のoneを表すun/aもある。例188)、189) では、部屋、或は中庭の4隅の内のひと隅について、これが伴うunも"片"を使っている。恐らく"片隅"は日本語のひとつの決まり表現となっている為であろう。

188) En un rinconcito de un cuarto oscuro, … (R. p. 10)

(うす暗い一室の片隅に、…)

189) …en un rincón del patio… (P. VI)

(中庭の片隅に…)

しかし、ふつう"one of～"のoneに当たるun/aは、むしろ"1"という訳が普通であるように思われる。

190) …, me pareció que me habían arrancado un miembro; (P. XL)

(ぼくは自分の手足が一本もぎとられた感じだった。)

191) …Se le partía una patita, … (R. p. 62)

(その一本の脚を半分に切りとるのだった。)

又，次の例では意味の上からun perritoを"子犬一匹ずつ"のように、"1"が訳の上に現れるのは当然である。

192) Cuatro veces fue y vino la perra durante la noche, y cada una se trajo a un perrito en la boca. (P.LXI)

(あの雌犬はね、…, 夜のうちに、あの道を四回も行っては帰り、子犬を一匹ずつくわえて運んだのだよ。)

例えば、例193) のun niñoは、限定された、“彼女の子供達の一人”の意味なのでunを伴っているのであって、“一人っ子”だとすれば、el niñoとなるところである。しかし、日本語訳では、ただ“彼女の子供”となっていて、“子供が何人かいてそのうちの一人”なのか、あるいは“一人っ子”なのかどうかは、わからない。つまり、日本語の感覚だとそういうことはさほど問題とならない、と言うことであろうか。

193) …la lechera, …porque se le estaba muriendo un niño. (P.LXI)

(牛乳売り…彼女の子供が病気で死にかかっているので…)

このように、スペイン語ではone of～を表しているが、日本語に何も対応がない、つまり、その名で呼ばれるものが他にもあるのか、それともひとつ(一人) しかないのかは解からない、という例は数多くある。194) でもuna ventana (窓) と不定冠詞をつけているからには、他にも窓がある、ということだが、日本語訳ではただ“窓”なので、たった一つしかない窓ともとれてしまう。

194) …cogimos a un pobre gato y, desde el tejado contiguo al colegio y al que se pasaba por una ventana… (R.p.26)

(私たちが一匹のあわれな猫を捕まえて、窓ごしに渡れた隣の屋根から…)

また、195) はある一つの部屋が舞台であり、una cómoda (単笥) はその部屋によって限定を受けるので、ひとつしかない単笥ならば、定冠詞がつく筈である。しかし、ここでは不定冠詞を伴っているので、そこには単笥がいくつかあることがわかるが、日本語訳では、その情景は浮かばない。

195) Había también un reló de pesas y sobre una cómoda una bolsa verde… (R.p.32)

（そこにはまた分銅時計があり、また単笥の上に緑色の袋があって…）

同じような例だが、196）のun lacayo（従僕）も、隠れた主語であるポンテコルボ公爵婦人の従僕であり、彼女の唯一の従僕ならば限定されて定冠詞を伴うか所有形容詞を伴うところだが、不定冠詞をとっているからには、他にも同名の存在が居るということである。しかし、不定冠詞を無視している日本語訳では、そこまでは解らない。

196）Luego, apoyándose en el brazo de un lacayo, …(S.p.2)

（それから、従僕の腕に寄り掛かって…）

つまり、こうして見ると、日本語というのは、対象が一つしかないものなのか、他にも同名の存在があるものなのか、についても、比較的無関心な言葉だ、ということが出来るように思われる。

2.5, スペイン語の不定冠詞の用法の中でも、日本語にかなり表し難いと思われるのは、一般的真理文の中に現れる、一般的に言及された対象が伴う不定冠詞である。

スペイン語では一般的、総称的に言及された対象は定冠詞を伴うことが多いが、ある具体的な個人や事物に暗に言及しながらも、直接的表現をさけて表現するような場合、当該の名詞に不定冠詞がよく用いられる。

例えば、197）のuna mujer, un hombreはPuesta de solの中のたった二人の登場人物の中の一人であるボールドウインのせりふで、un hombreは暗に自分を、una mujerは聞き手の公爵夫人を指しているものである。訳では、勿論una mujerは“ご婦人”、un hombreは“男”となって、前述のようなここで不定冠詞を用いるスペイン語の意図は日本語訳には現れていない。

197）Una mujer es siempre más《poética》que un hombre；(S.p.34)

（がんらいご婦人は男よりも、常に〈詩的〉に出来上がっていますし…）

198）では、las inquietudes以下が一般的真理をあらわすものと考えるが、この場合の一般的意味がこめられているuna mujerは暗に話し手の公爵夫人が自分を指している名詞である。この不定冠詞が日本語訳に対応がないこと

は、197）と同じである。

198）…las inquietudes que sufre una mujer cuando es tenida por hermosa e inspira deseos! (S.p.42)

（女が他人から美しいと思われ、そして相手から欲望を起こされる時に感じるあの不安…）

又、次の例は、文自体は一般的な真理文ではないが、un hombre（一人の人間）は、暗に具体的な個人を指しながら、直接的言及を避けて、“一人の人間”としたもので、このunは一般的表現の不定冠詞である。日本語訳では、ただ単に“人”となっている。

199）Nunca oí hablar más mal a un hombre. (P.XXIV)

（あの人よりもきたないことばでののしり、…ような人をぼくは一度も見たことがない。）

吉本ばななの“キッチン”では、引っ越しのために部屋探しをせざるを得ない、というところで、“引っ越しは手間だ”というせりふがある。これに対してスペイン語訳では一般的表現の不定冠詞un/aを用いて“Una mudanza es un trabajo pesado.”としている。

しかし、一般的表現の不定冠詞が用いられる例は、今回のスペイン語から日本語への資料とした4作品の中では、上の3例しかなく、これだけで結論ずけることは出来ないが、このような不定冠詞の微妙な使われ方を日本語に写し出すのは至難の技かと思われる。

2.5　最後にスペイン語特有の不定冠詞複数形unos，unasの日本語における対応を考察してみよう。unos, unasを、双数名詞以外の名詞複数形と用いられている場合も不定冠詞とみなすか、不定形容詞ととるかについては問題があるが、今はこの議論に入らず、すべてのunos、unas（数詞の前で用いられている場合を除く）を考察の対象としたい。（拙論「スペイン語の不定冠詞複数形について」駒沢大学論集第2号参照のこと。）

2.5.1.　まず不定少数を表すunos，　unasは資料とした作品では“数人（匹…）幾人（匹…）”“～が何枚（匹…）か”など、なんらかの形で訳されている場合が多かった。

つぎの例では“いく～”という訳が見られる。

200）…nos daba unas paciencias…(R.p.32)

（…私たちにいくつかのパシエンシャを下さるのだった…）

201）…y entonces surgían de debajo de los tales bultos unos muchachos …(R.p.86)

（…するとくだんの人形台の下から…幾人かの子供が現れて…）

202）Luego seguirá unas noches más el ruido de los chiquillos. (P.CIX)

（こどもたちのお囃子は、それからあともいく晩かつずく。）

つぎにあげる例では“数～”という形が当てられている。

203）…en hombros de unos hombres vestidos con largas túnicas negras …(R.p.86)

（…長い黒のチュニカを着た数人の人の肩に乗って、…）

204）…no eran sino unos soldados romanos, (R.p.90)

（…数名のローマ兵士にすぎなかったが、…）

205）…en unos días de tregua, hubo colegio, …(R.p.98)

（…休戦の数日間には学校があったが…）

206）…venía a pasar unas semanas en su palacio de Cap Martin… (S.p.18)

（カップ・マルタンに在る大邸宅…で数週間を過ごすために時々やって来る…）

また“何～か”という形の訳も多い。

207）…, le levantó unos miseros trapos …(P.XX)

（…ぼろきれを何枚か取りのぞく…）

208）…-unos perros chatos, pequeños y grises, …) (P.C).

（…鼻ぺしゃの、小さな灰いろの犬が何匹か、…）

209) Unas chiquillas casi desnudas la rodeaban silenciosas. (P.CVIII)

(ほとんどはだかの女の子が何人か、だまってまわりに立っていた。)

しかし、日本語訳の上での工夫も見られる。次のunas palabrasは“二言三言”と訳されている。

210) El maestro…pronunció, más que dijo, unas palabras que nos llegaron al corazón …(R.p.16)

(先生は…私たちの心臓にまで届いた二言三言を、話したというよりは、むしろ宣言した…)

211) のunos saltosも“大飛びに跳ね越え、飛び越え”と訳され、複数形を持たない日本語の対応の見事な工夫が見られる。

211) …, dando unos saltos enormes por cima de los carrascales y los lentiscos, se alejó…(C.p.38)

(…柏や乳香の木を大飛びに跳ね越え、飛び越え、逃げて行き…)

なお次の例では、unos muchachos traidoresが“いたずら坊主ども”と訳されていることで、対象が複数であることは表されているが、少数なのか多数なのかまではわからない。

212) …unos muchachos traidores les tenían puesta una red a los pájaros. (P.XXXII)

(いたずら坊主どもが小鳥をつかまえる網を張ってあった。)

しかしunos, unasも必ずしも常に訳されているわけではなく、上例205) のunas paciencias のunasも、次に挙げるように、同ページの少し上の例217) では訳されていない。

213) …en la bolsa verde unas paciencias redonditas …(R.p.32)

(その緑色の袋の中に狐色にこげた丸っこいパシェンシアが入っていた…)

その他、unos、unasが日本語に現れていない例を、それぞれの作品から幾つかずつ上げよう。

214) Y la madre acabaría con unas palabras por el estilo de éstas :

(R.p.14)

(そしてその母親は次のような言葉で話しをむすんだことだろう。)

215) …y antes de hacerlo se pone a hacer unos gestos como si se alzara de hombros … (R.p.62)

(…そうする前にまずあたかも肩を上げでもするような仕種をして…)

216) …entre unas nubes enormes… (P.XVIII)

(…巨大な雲の間に…)

217) …y, mostrando unos dientes amarillos, …, rebuznan, … (P.XXXI)

(黄いろい歯をむきだし…, 鳴き声を立てる。)

218) …haciendo que come unas campanillas coloradas, …(P.XXXIX)

(色あざやかな風鈴草をたべるようなふりをして…)

219) …se reían con unas carcajadas, …(C.p.38)

(大きな声で高笑いしながら…)

220) …agazapóse en un ribazo junto a unos chopos de copas elevadas y oscuras, …(C.p.68)

(高く小暗く梢を張った黒柳の生えた小高いところに、しゃがみこんだ。)

221) …sonó al mismo tiempo un grito, al que siguieron después unos gemidos sofocados. (C.p.104)

(それと同時に、…, 悲声が聞こえ、それにつずいて絶え入る呻きが漏れて来た。)

このように、unos, unasが訳されなければ、un/aとの区別が日本語ではつかないことになるが、翻訳を読んでみて、その辺のあいまいさが気にならないのは不思議である。吉本ばななの“キッチン・満月”のスペイン語訳には、この不定少数を表すunos, unasが20回も使われているが、日本語の原作では、これに対応する句は“少しだけの期間”(unos días)と“ほんの数センチ”(unos centímetros)しかない。つまり、あとはスペイン語訳で勝手に複数形にして不定少数の不定冠詞を用いているのであって、原作では本当に作者

が不定少数のつもりなのか、ひとつのつもりなのかはわからない。例えば、“雄一は冷蔵庫からグレープフルーツを出して”ではグレープフルーツは一個なのか数個なのかわからないが、スペイン語訳では“Yuuichi, …, cogió unas pomelas de la nevera …”とunasを使い数個のグレープフルーツになっている。もう一つ例を挙げれば、原作の“私が夜中眠れなくてプリンを買いにファミリーマートへ走っていったら”では、筆者としてはプリンは主人公が一人で食べようとしているのだから、一個のように思えるが、翻訳では“No podía dormir y salí a comprar unos flanes al Family Mart ”と、数個のプリンを買いに行ったことになっている。こうして見ると、日本語とはいかに数にたいして曖昧な言葉であり、スペイン語が（その他の外国語にもそういうものが多いと思うが）数にたいして几帳面であることが感じられる。

2.5.2. 2.4.でも言及したが、名詞の中には、双数名詞と呼ばれ、対をなす存在をあらわすものがある。これらは“一対”の意味では常に複数形(gafas 眼鏡、manos 手など）で用いられ、伴う冠詞は常に複数形であるが、これはあくまで形の上での一致である。従って、スペイン語では形は複数形でも、意味はあくまで“1”であるが、日本語訳ではどのような対応が見られるのであろうか。あいにく資料とした作品では例が非常に少なく、あくまで参考程度である。

次の例のunos tíosは普通の名詞が双数化して“叔父夫婦”として用いられているが、このunosは当然紹介導入の不定冠詞であり、ここでは“ある”と訳されている。

222) Nos pasamos lo más del bombardeo metidos en la lonja de una confitería de unos tíos míos, …(R.p.96)
(私たちはある叔父夫婦の菓子店の倉庫に入ったまま…,砲撃の大部分を過ごした。)

また、次の２つの例では、unosは訳に現れていない。

223) Después, en ese brusco cambiar de la infancia, como llevan unos zapatos…(P.III)
(それから、子どもの心のあの気まぐれで、…，だって靴もはいているし…)

229) …, entre el rastro de los reses las breves huellas de unos pies pequeñas… (C.p.28)
(たくさんの足あとの中に、…，小さな人の足あとが見えるじゃございませんか)

双数名詞の場合でも、おそらく“一足”、“一対”、“一組”などのように、“1〜”を用いた訳が使われてもおかしくないとは思われるが、やはり単数のun/aの場合と同様に、日本語ではこの場合の“1”は重大な問題ではない、と言うことかも知れない。

2.5.3. なお、不定冠詞複数形は当該の名詞複数形に対して、分類が行われていることによって、伴われている場合もある。例えば、236)のunos príncipesは譬えとしての“王子さま”の意味であり、訳も従って“王子さまにでも”となっている。

230) …se creen unos príncipes: (P.III)
(王子さまにでもなったつもりだ。)

“満月”の翻訳のほうにはQuizás por tener unos padres cariñosos. があるが、このunos padresは主人公の通う料理学校の生徒たちの両親であり、当然限定をうけているが、形容詞のcariñosos（やさしい）に修飾されていることで不定冠詞を伴っている。しかし、勿論原文では“たぶん、あたたかな両親に。”となっているだけである。

3. 以上著者も訳者も異なる4つの作品を材料として、スペイン語の不定冠詞の日本語訳における対応を考察してきた。たった4つの作品だけで結論を下すことは勿論不可能であるが、おおよそ次のような傾向が認められるよう

に思われる。

0.2.で述べたように、日本語に訳される率は不定冠詞の方が定冠詞よりもはるかに高い。しかしそれでも、不定冠詞が日本語訳の中に何も表されていない例のほうが、約75%もあるのである。その僅かに日本語に表された中で、un/aが日本語に訳されないと全く意味不明になる、というのは、主にいわゆる数詞と見なされるものである。そして、これらの特徴はすべて、“1時間”のように、“1～”の形をとることで、それ以外の表し方は無い。又、数詞的なもの以外のun/aの日本語の対応の仕方で1番多かったのは“1（人、輪、本…）の”の形であり、つぎに“～のひとつ”、“ひとつの～”、“ある～”、“1種の～”、“片方の～”であった。

ところで、不定冠詞は、スペイン語においては、Ramón Sarmiento Aquilla Sanchez (Gramática básica del español, norma y uso, Madrid 1989)が、可算名詞 (contable) を具現化するために義務的に使用される、と述べているように、対象が数えられる概念であることのサインと言える。

しかし、一方日本語というのは、そもそもはっきりした複数形というものを持たず（名詞によっては“家々”のような繰り返しの形を持つものもあるが）数えられる、とか単位とかいうことに無頓着な言語、と言えるように思われる。だから、日本語で数詞的な用法以外でなんらかの形で“1”が出てくるのは、“一瞬”、“ひと息に”、“一人も～ない”、“一言も”のような成句と合致する場合が多い。そしてそれ以外で“1”が現れるのは、訳者の好みの問題および原文に何らかの影響を受けている場合であるように思われる。では、訳者が違えば、un/aの扱いは異なって来るのであろうか。その可能性は充分考えられよう。翻訳の少ないスペイン文学の場合、ひとつの作品について異なった訳本で考察を行うことは不可能に近いが、Platero y yoについて、その138章中、18章を抜粋して訳した“石井洋子訳「プラテーロと私」と長南実訳の同章と照らし合わせてみると、たった1カ所だけ、スペイン語の不定冠詞にたいする対応が異なる箇所があった。

231) La entrada del otoño es para mí, Platero, <u>un perro atado,</u>

ladrando limpia y largamente, …(P.LXXXVI)

(長南訳：秋のはじめというのはね、プラテーロ、ぼくにとっては…，つながれて澄んだ声で、ながながと吠えつづける犬のように感じられるのだよ…)

(石井訳：私にとって、秋のはじまりというのはね、プラテーロ、…，一心にながながと吠えつづける、一匹のつながれた犬のように思えるのだ…)

ここで、un perro atado…は譬えとして出されているものであり、伴っている不定冠詞は分類のそれと思われる。長南氏訳では、ただ「犬のように」となっているが、石井氏訳では「１匹の…犬のように」と不定冠詞が“１”とも訳されている。しかし、勿論日本語の意味に何ら相違はない。このほかの箇所では、長南氏と石井氏の不定冠詞にたいする対応は全く同じであった。138章中の比較であり、単に２人の訳者を対象としただけであるから、とても結論は出せないが、意外な結果だったとも言える。

では、果して翻訳ではなく、はじめから日本語で書かれた作品では、どのくらい“１”あるいはそれに類する表現が出て来るであろうか。これは本論の将来のテーマでもあるのだが、吉本バナナの“キッチン”およびその続編“満月”を調べて見ると、文庫本156ページ中、“ひと（つ)”、“１～”が現れる回数は58例しかなく、しかも、スペイン語の不定冠詞（日本語の58回に対して、10倍ちかい565個あった）と合致しているものはたった11であった。そして、その11中、数詞的と思われるものが、“１日（un　día)”，“１年（un año)”，“１カ月（un　mes)”，“ひと冬（un　invierno)”，“ひとつ年下（un año menos)”，“一度（una vez)”，と６例もある。その他は、強調的と思われる“一本道（un camino seguro)，”一言一言（una palabra tras otra）の２例、そして残りの３例は、いわゆる任意の１単位を表すと思われる、“お茶を一杯（una taza de tē)”，“店を一つ（un bar)”，と分類的と思われる“ひとつの病（una mala costumbre)”であった。

一方、日本語で“１～”に準ずる語を使いながら、スペイン語で不定冠詞

が当てられていない例で圧倒的に多かったのは、小説の性質もあるが“ひとり”、“(女手) ひとつ”(スペイン語でsolo/a) がなんと13例あった。また，“なにひとつ”はスペイン語ではnada，“いちめんの”は、completamente，“一滴一滴”は冠詞なしのgota a gota，“身ひとつ”はsin nada，“ひとり部屋”はhabitación individual，“一階”は、la plantaと訳されており、発想の違いも感じさせられた。又、“ある～”については、“ある夜”がひとつだけあったが、これもスペイン語訳の方はal amanecer (夜明けに) と意訳がなされていた。unos, unasに関しては、2.5.でくわしく述べたが、“片～”の例については、ひとつだけ“片方の手”というのが出てきたが、スペイン訳は“la mano”と定冠詞で処理されていた。

勿論これ1冊で結論ずけることは出来ないが、スペイン語から日本語への資料とした4作品で、日本語訳であらわれた“1～”およびそれに準ずる形は、こうして見ると、訳者の好みもあるかも知れないが、結局のところそれは翻訳の日本語、つまりスペイン語の構文、横文字の組み立てに影響されている日本語であって、真の日本語の発想から生まれ出た自然の表現とは何か異なるものであるように思われる。

冠詞をもたないまでも、単数対非単数に関しては、かなり細かい区別を持っていたラテン語にやがて不定冠詞が発生してくることに対して、日本語はまったく異質な言語であり、1単位とか複数というものが、ほとんど無用の概念である言語のように思われる。

又、不定冠詞の持つ“非定”の概念は、それも“定”の概念が明確に表されることが少ない日本語では、“ある～”という形を持つものの、これもほとんど無用の概念であるように思われる。今後、外国語からの翻訳がますます増えて行くことは容易に想像され、マスコミ関係や商業・貿易の分野では“1～”その他不定冠詞を直訳するケースが増えるかも知れない。しかし、スペイン語において、不定冠詞が文語、口語の別なく、欠くべからざる要素であるのに対して、日本語では少なくとも口語において、あるいは純文字において、“1つの～”は恐らくまだまだ無用なものであり続けるのではなかろう

か。

1994年 9 月

引用文献

Juan Ramón Jiménez “Platero y yo”, Aguilar (P)
長南実訳“プラテーロとぼく”岩波少年少女文庫
石井洋子訳“プラテーロとわたし”
Gustavo Adolfo Bécquer, “La Corza blanca” (C)
高橋正武訳“白鹿”，大学書林
Miguel de Unamuno “Recuerdos de niñez” (R)
宮城昇訳“幼き日の思い出”，大学書林
Vicente Blasco Ibáñez “Puesta de sol” (S)
笠井鎮夫訳“落日”，大学書林
吉本バナナ“キッチン、満月”，福武文庫
Junichi Matsuura, Lourdes Porta訳“Kitchen” “Luna llena”, Tusquets Editores.
Chistes sobre amigos y amistad, Editorial de Vecchi
現代スペイン語辞典、白水社（白水）
西和中辞典、小学館（小学）